月の箱庭

悠月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月の箱庭

【Ｎコード】

Ｎ８３４０Ｃ

【作者名】

悠月

【あらすじ】

ようこそおいでくださいました。月の血脈が奏でる一夜をどうぞお楽しみください。

プロローグ

こんばんわ

陽の血脈の方

月の光に惹かれてやってきたのですか？
今日は美しい月夜でございますものね
こんな日には、あなた方の血もさぞや騒ぐことでございましょう

ああ
申し遅れました

私、案内人のトーヤと申します

どうなさいました？
そんな怪訝な顔をなさって

ああ

もしかしたら、この呼ばれ方は耳慣れないかもしれませんね

私どもの世界では

あなた方、人の世界のものを陽の血脈と呼ぶのでございます

そして

そうでないものを月の血脈と呼ぶのでございます

彼らは時に魔物と呼ばれるものです

夢魔　悪魔　吸血鬼　影

あなた方は苦心のすえ名前をつけてくれますね

呼び方は様々でございましょうが総じて月の血脈と呼ぶのでございます

時に陽の血脈から月の血脈へと変異される方もいらっしゃいますがね

お分かりいただけたでしょうか？

ああ

もうすぐ時間でございますね

今宵も月の狂宴がはじまります

今日の主役は夢魔でございましょうか？
はたまた夢幻（ジン）でしょうか？

よろしければご覧になっていかれますか？

あなた様のお気に召すものがあればよいのですが

では夜の帳を開きましょう

第1夜：夢幻（ジン）

太陽が燃え尽きて砂のかなたに沈むと辺りは途端に温度を変える。
月が中天に座すころには身を切るような冷たい風が吹きすさぶ。
昼間体を焼くような灼熱の大地があったなど嘘のようだ。
ここは砂漠の小さなオアシスの辺。
ほんとに小さなそれは少しの水をたたえるだけだった。
それでも旅人には金にも勝るものなのだ。
今宵も旅人が二人。

「今日は月が明るいな」

一人は頭から毛布を被り、両手で湯気の出ているコップを握りしめ頭上を仰ぐ。

「そうだな。満月だからな。」

もう一人もコップの中身を飲みながら月を見る。
空に雲はなく、大きな月が浮かぶ。
そのあまりの光に星の瞬きは見えない。
周りの闇さえも光に支配され藍になる。
どこまでも続く砂丘に影をつくり、青く輝く世界は幻想的ですらある。

「西の奴らは満月が嫌いなんだってな。」

こんなにきれいなのにと呟き液体を一口流し込む。

「本当にきれいなのにな。」

旅人にとって月は導きの光。
暗い夜道を照らし、安心をくれる。
ここまで明るいと星読みさえままなれないけれど。
だが、西方の人間にとって満月は不吉な徴。
ぽっかり浮かんだ光る球体は魔物の目なのだと言う者もいる。

「どこが嫌なのだろう。」

「さぁ、美しいものは人を惑わすからな。」

そう、まるで蜃気楼のように。

ゴポリ

「・・・？」

ゴポ

「お前、火を止めたか？」

水が沸騰するような音をいぶかしんで尋ねた。

「止めたよ。」

先ほど確かにお茶を入れるために湯を沸かしたが、火は消したはずだ。

ゴポッ

二人はいっせいに振り向いた。
小さなオアシス、水溜りほどのそれがあわ立っている。
月のしずくは乱反射してその中で幾つにも見える。
次第に立ち上った水柱は人型を取った。

「そう、時に美しいものは人を惑わしますね。」

そこに現れたのは黒い帽子とコートを纏ったものだ。
お辞儀をするように頭を下げているため顔は分からない。

「・・・・。」

一人は呆けたように口を開けたまま固まっていた。

「・・・・。」

もう一人も無言ではあったがさして驚いているようにも見えない。
今宵は吟遊詩人が語るような幻想的な夜なのだ。
異界の扉が開いても何ら不思議ではない。

「あんたはジンか。」

初めて見たと返答を聞かずに口にする。
ここは西の彼方ではないのだ。満月の夜に現れるのは魔物でも聖なるものでもない。
其処の現れるのはすべてが夢幻(ジン)なのだ。
あの月が欠ければ姿を消す夢うつつの存在なのだ。

「人は様々な名で私を呼びますがね。お好きにどうぞ。」

ジンはゆっくりと顔を上げた。
帽子の下に現れた瞳は天空の月のように金色に光っている。
一人の男は西の奴らの言ったことは正しかったのかと呆けた頭で考えた。
しかし、口は未だに動かず、目の前のものを凝視するばかりだ。

「別に喰いついたりはしませんよ。」

ジンは目を細め、可笑しそうに男に告げた。

「それが願いなら叶えてもかまいませんが。」

しかし調味料が砂ではね・・・風にまぎれて聞こえてきた言葉に男はヒュッと喉を鳴らした。
冗談めいた言葉が全く冗談には聞こえない状況だった。

「だろうな。砂まみれの人間を喰ったところで不快なだけだ。」

男は驚いて相方を見やった。
どうしてこいつは平然とアレと言葉を交わしているのだろうかと。
それとも惑わされているのは自分だけで相方さえも幻の一部なのだろうか。

「前の町の砂まみれの料理はまずかった。なぁ。」

「・・・ああ。確かに・・・。」

そう、確かに前の町で食べた料理はひどかった。
口の中はジャリジャリと不快な音をたて、味もよく分からなかった。
砂漠の旅なのだから決して贅沢はいえないけれど。
しかし、そこで得た水はなんとも言えないほどうまかった。
火照った体にはあれほどうまく感じるものもないだろう。

「さて」

ジンが再び言葉を発したので、男はびくりと身を震わした。
「あなた方の願いはなんですか？」
「・・・願い？」
「そう、その気が無かったとしても、あなた方は私を呼び出した。これも何かの縁でしょう。願いを伺いましょう。」
叶えるかどうかは分かりませんがね。男にはジンがそう続けたような気がした。
「それで、あんたは何を代償に持っていくんだ。」
相方は面白そうにジンに尋ねた。
西の彼方の悪魔という魔物は願いを叶える代償に魂をねだると云う。
「願いごと次第ですかね。」
ジンは白い指を顎に当てながら応えた。
「何でも叶えてくれるのか？」
男は何を言うのかと、相方の服を引っ張った。
きっと魂を奪われるに違いない。
「それも願いごと次第ですが。」
ジンはゆっくりと口角を上げた。
月光を受けたその顔はそれは美しく恐ろしく見えた。

自分から魂を差し出してしまいそうになるほど。

「さぁ、願い事はなんですか？」

―山のような金ですか・・・

―それとも不老不死ですか？

「お前何かあるか？」

相方は男を小突いた。

「えっ？」

咄嗟に言われても思いつかない。逆に男も相方に尋ねた。

「願い事っていってもなぁ～・・・生活に不満があるわけでも・・・

」

砂漠の旅を続けるのはつらい時もあるが、生まれて時からそれが自分の生活だったのだからたいして不満があるわけでもない。
御殿に住みたいとも思わないし、ましてや永遠なんて想像もできないほどの時間を生きたいとも思っていない。
せいぜい5，６０年生きられれば満足なのだ。
それは男にしても同じであった。

「何か無いのかよ。若いくせに。」

相方はそう言うが、たかが5歳しか離れていないはずだ。

「・・・何もないのですか？つまらない人間ですね。」

ジンは呆れたという風にため息をついた。
こうしているのを見ると魔物というより人に近い気がして、恐怖心が次第に薄れていった。
落ち着いて目に入ってきたのは、ジンの足元に広がるオアシスと呼ぶには小さすぎる水溜りだ。

「それなら、このオアシスを枯らさないでくれ。」

「・・・これをですか？」

ジンは怪訝そうな目で水溜りを見つめた。

「それはいいな。また来た時も助かるし、他の旅人が来た時も助かるからな。」

ここでは手に余るほどの金よりもコップ一杯の水のほうが貴重なのだ。

「本当にそんなものでいいのですか？」

—どんな願い事でも叶うかもしれないのに？

―見ず知らずの人間のためにこんな水溜りを残せと？

男は空いたコップに水を汲みジンに差し出した。
眉を寄せるジンにお構いなしにコップを突きつけ言った。

「砂まみれの人間よりよっぽどうまい。」

どうにも引き下がりそうにも無い人間に諦めたようにコップを受け取り、口を付ける。

「ただの水ですね。」

ああ、水だ。
嬉しそうに笑う人間。

「まぁ、砂まみれの人間よりかはましですか。」

ジンは再びため息をつく。

「いいでしょう。その願いを叶えましょう。」

風が起こり、ジンのコートがはためく。

「だっ代償って？」

いまさら気がついて男はあせった。
この願いの代償は何なのか。
魂とでも言われたらどうしようか。

「一杯のうまい水で結構ですよ。」

その声の後、吹き荒れた突風とともにジンの姿は掻き消えていた。
残ったのは月光に照らされた水溜りと二人の旅人とどこまでも続く砂だけ。

―たまには慈善活動もいいでしょう

「・・・夢かな。」

「さぁな。」

あまりにも静かな風景はジンが現れる前と変わりない。
やはり月が魅せた幻か。

「何年か後にここに来て見れば分かるだろうよ。」

そこのあるのは小さな水溜り。
オアシスと呼ぶには小さすぎる。
明日にも消えてしまいそうな。
何年か後に未だこの姿があったなら・・・

「やっぱり、きれいだよ。」

男は呟く。
あれは魔物の目ではなく、導きの光なのだから。

第1夜：夢幻（ジン）（後書き）

今宵は夢幻（ジン）でございました。よろしければ次の夜もお楽しみください。

第2夜：夢魔

暗い暗い迷路の中
足元を照らすのは心もとない月の光だけ
私は囚われたのだ永遠に

どれだけ時間が経ったのだろうか
もう時間の感覚など麻痺していて
何百年もぐるぐると歩き回っているようだ

確かなのは頭上の月は一度も欠けていないことだけ
道は増幅し渦を巻き縮小して張り詰める
どれほど大きなものに掴まってしまったのかも見当がつかない

ここを支配するのは
薄暗闇と静寂と狂気と・・・

私はもう抜け出せない

それにすら心地よさを感じてしまうのだから
暗闇は安堵を生み
静寂は安寧を生む
すでに出口などどうでもよいのだ
男は迷路の一部なのだ
そこは男にとって安らかな世界だった

しかし静寂をゆっくりと揺らすものがある
この世界には似つかわしくない不協和音
その音は静かに男の中に響き渡る

その音は暗闇を振動させて黒色を濁らせる

「君はダレ？」

久しぶりに声を出した気がした
男は久しぶりに己を認識したのだ
自分は迷路そのものではないのだと
常に侵蝕され拡大していく世界に置き去りにされたモノなのだと

目の前に現れたのは姿見だ
男は己の姿を垣間見た
忘れたはずの半身を
頬を伝うのは血と同じ温度の透明は雫
月の光を一身にうけてきらりと光る

どうか止めてくれ

この世界を揺らさないで

やっと手に入れた安らぎなのだから

さらに強く音が響く
それは歌のようだ
それに世界を壊される恐怖を感じるのに同じくらい懐かしさがこみ
上げる

どうかこの音を止めて

壊れてしまう
世界が
ああ
呼ばないで
その光りに縋ってしまうから

「縋ればいいじゃないか」

声を出したのは歪んだ鏡の中の自分だろうか

「もう私には光りなどいらないのだ」

「本当に？」

「・・・ああ」

光りを求めた結果がこの世界なのだから

「ならば、なぜ光りなど作ったの？」

「え？」

なぜ真の暗闇の世界を創らなかったのだ。
絶望だけで彩るのなら月の光など必要ないではないか。
あれは常闇を照らす光り。

「未だ呑み込まれてなどいないのだろう」

囚われたのなら牢獄で十分なのだ。
迷路など必要ではない。
増幅し、光りまで届く道など求めなくてもいい。

「わたしは・・・」

ああ
わたしは出口をずっと求めていたのか
あの光りに続く道を

「この迷路から抜け出そうとしていたのか・・・」

「そうだよ」

足掻いて足掻いて疲れ果てて眠るまで。
歌が響く。
ゆっくりと優しく漣をたてながら。

「君はダレ・・・？」

どうしてわたしのために歌ってくれているのだろう。
暗闇を包む殻に輝を入れて、淡い光りが差し込んでくる。
一度も欠けたことのない月がかけていき、夜明けがやってくる。

「知っているだろう？」

そこにいるのは自分ではなかった。
鏡に中で不適に笑うのは赤い髪の少年だった。

『岸辺を金色が照らしていく
全てを光りに染め上げて
あなたは言ったわ
明けない夜はないって
おはようと言って
もう一度手を繋ぎましょう』

「そうだね。知っているよ」

あの優しい声の主を自分はよく知っているはずだ

「ああ、はやく起きなくてはいけないね」

寝坊をすると怒られてしまう

「そうだ。早く起きろ」

迷路が開ける。
絡まった道は解れて一本の道になる。
まっすぐに夜明けに続く道へ。
大きな一枚の扉の前にたどり着く。
夢の終わり。
もう一度振り返ってもそこには少年の姿は無い。

「ありがとう」

それだけ告げて扉を開ける。
あまりの眩しさに目を閉じた。

「さぁ起きて
また新しい日がやってくるから」

歌が鮮明に聞こえる。
うすく目をあけると、そこは白い部屋だった。
窓辺には歌声の主がいる。
朝日を浴びた髪が金色に光っている。

「また、おはようと
「おはよう」

少女が振り返る。
顔面を驚きと歓喜で彩って

「シャーナ！」

暖かいものが飛びついてくる。
あの世界には無かった物。
音も熱も匂いも。

「おはよう」

「寝坊のし過ぎよ！どれだけ眠っていたと思っているの」

頭をなでてやると強くしがみ付いてくる。
事故の後、一週間近くも意識不明のまま眠り続けたのだと少女は涙ながらに語ってくれた。

「何をしていたのよ！わたしはこんなにも心配しているのに」

「夢を・・・」

不思議な世界を思い出す。
いつもは曖昧に消えていく夢はハッキリと脳裏に焼きついてはなれることはなかった。

「夢を見ていたよ。とても不思議なね」

けれども誰と会話していたのかは曖昧で、次第に霧のように溶けていった。

「ボクはね極上の夢を食べる夢魔なんだよ。悪夢を見せて喜ぶような低俗なやからではないのでね。」

歪んだ鏡の中で少年が笑った。

「夢に巣くうなんて愚かしい事だよ。ここは僕たちの境域なのだからね。」

鏡は砕け曖昧な世界は崩壊した。

第3夜：賢人と影

老いとは何ぞや
体に刻まれた皺は老いか？
幾年の風雪に耐えた瞳の奥の黒い光りは老いによるものか？
怖れるものがなくなったのは老いたからか？

ああ

だが

我が身一人残されるのはなんと辛いことか

死ななずとは何ぞや
体を両断されても意識があることか？
水に沈んでも思考することか？
不死とは
それは生きているのか？
死が無いものに生はあろうか？

私は

私とは何ぞや
人か？
否
魔物か？

分からぬ
誰かから見ればそうかも知れぬ
生物か？
それすら私は知らぬのだ

沈殿していく思考
どこで物事を考えているのかもあやふやで
浮上することなど思いもしない
陸に上がれば
月の光の重さに圧倒されて縮み上がってしまう
肺が崩壊し
虚しく口を開閉する

全能とは何ぞや
多くのものが私を知恵と呼ぶが
私は己すら分からないのだ
全能の木とは何ぞや
この数多の智と呼ばれるものに圧迫され硬くなっていく我が身か
この世の全てを知ろうとも
私は人の思考の一つに辿りつけないのだ
『不死の身になりたい』
ああ
なんて贅沢な望みなのだろう
どれほど願っても
私は沈黙しそこにあり続けるというのに
いくら声を張り上げようとも
どれほどの者に届くだろう
過ぎ去ったものに
敬意と共に嫉妬に似た感情を抱く事を

誰が知ろうか

ああ

こんなものなど分からぬほど愚かになりたい

ああ

ソレすらも凌駕するほどに賢くなりたい

それとも

だれかこの身を滅ぼしてくれやしないか

それとも

だれか答えをくれやしないか

私は何者なのか

その言葉を聞き取った君は薄く嗤う
そんなにも愚かしいか
そんなにも哀れか
暗い思考に忍び笑いが響く

『馬鹿だねぇ』

オマエガヒトカダッテ？

マモノ？

『魔物は老いも死も考えやしないよ。』

ソンナコトドウデモイイノダカラ

『破滅を望むのはヒトだけさ』

『愚かしいほど純粋にね』

君は願わないのか？

『私が願うのはワタシの快楽だけさ』

快楽？

『そうとも』

ダケド

イマハ

チットモ楽ナイ

ダカラ

『その身体をよこせ！』

室内を満たしていた闇が突如質量を持った。
人型を取った闇が襲いくる。
長い腕は老人を捕らえ床に叩きつけた。
背中が悲鳴をあげ、開いた口から悲鳴が漏れでる

『そんなに其処にいるのが嫌なのならば、ワタシと同じように冷たい地面を這うがいい』

開いた口から鼻から耳から暗い闇が入ってくる

何ヲスルノダ！

もう悲鳴すらあげられない

『いつも、いつも、いつも付き従ってやっているのに』

ヤメテクレ

『そんなにも厭うならば堕ちてしまえ』

老人の身体が闇色に変化するにしたがって、目の前の人型は色彩を帯びる

『嘆く事も悔やむ事も生きることもいらぬ』

アア

アレハ

ワタシデハナイカ

『今日からお前がワタシの影だ』

第４夜：蒐集家

冷たい雨が張り付いて艶やかな髪の毛を重くする。
コートに描かれる水玉模様も次第に多くなり、女は小さく舌打ちをした。
今日はとんでもない厄日だ。
後輩はへまをやらかし上司からは残業を押し付けられた。
昼食もろくに取れぬまま、ずっとパソコンとにらめっこ。
ようやく帰路に着くころには見計らったようにこの雨だ。

ブランドのもののコート。
色も形も好きではない。
けれど出来る女を演じるためにあつらえた。

足元を彩る靴も血豆をこさえながら、やっとの事慣れたのだ。
けれどぬれた路地の上とは相性が悪く、何度も体を揺らす羽目になった。

もう、嫌だ
何もかも投げ出してしまいたい

最近全てがうまくいかない
いっそのこと、この身と共にすべて捨ててしまおうか

暗い思考で街中を歩きながら目に付いたのは小さなギャラリー。
小さなドアからは暖かそうな光が漏れている。
絵になど興味は無いけれど、この雨からは逃れたかった。
思い切ってドアを開ければ、心地よい暖かさが頬を打つ。

「いらっしゃいませ」

現れたのは一人の紳士。
室内の温度と同じ柔らかな笑みを湛えていた。
首元のループタイがひどく目を引いた。

「コートをお預かりしましょう」

「えっ・・・ああ」

こんな小さなギャラリーで丁寧な扱いを受けるとは思っていなかったので少々戸惑った。
長居するつもりなど無いのにと思いつつ、笑みに促されコートを渡す。
その紳士の腕に納まったコートを見てそんなに悪くないかもしれないと思ってしまった。

そこは本当に小さなギャラリーだった。絵は一枚きりしかない。

青いカップを持った少女が一度として表情を変えずにどこか焦点の合わない目で此方を見ている。
その絵の題名は『青いカップ』
少女の背後はうっそりとした灰色で黒いドレスに埋もれた顔の白さと手元の青ばかりが目に付く絵だった。

あまり好きではないな
そう思っていると、紳士が背後から声をかけた。

「この作品にはこんな話があるのですよ」

そこには看板もなく橙のランプの光りがほんの少し漏れ出ているだけのドアだった。
ドアを開けるとリンと客の来店を告げる涼やかな音がする。
店内を淡い光りが包み、茶を基調とした店内が暖かく迎えてくれる。
カウンター席をあわせても２０席もないであろう狭い店内はけっして息苦しさを感じさせはしなかった。
ゆるりと流れるオルゴールの調べに導かれ、いつもの席に座ればマスターが微笑を浮かべる。
「いらっしゃいませ」そんな言葉でこの静かな世界を壊したりしない。
銀色の髪はきれいに撫で付けられ、眼鏡きらりと光る。
布巾でグラスを磨く姿は奇跡のようだった。
理想の老紳士を描いた絵から抜け出したのではと思ってしまうマスターは背後の棚の扉を音もなく開けた。
ここでは好きなカップにお茶を注いでくれる。
色とりどりのアンティークカップが鎮座して選ばれるのを待っている。
こんな隠れ家的な喫茶店に飛びいりでくる客は珍しく、店内にいる客は殆ど顔馴染みだ。
顔馴染みといっても言葉を交わしたことはなく、彼らの名前も帰る場所も知っているわけではない。
この空間を共有する同士なのだ。
無粋な言葉でこの世界を揺らしたりしない。

もしかしたら空間を彩る椅子と同じ意味しか持っていないのかもしれない。
それぞれに定位置があり、お決まりのメニューがある。
もちろん選らぶカップも決まっているのだ。
カウンターの端に座る老人は何の飾り気もない白いカップにダージリン。
手にはいつも分厚いミステリー小説。
金文字も擦り切れた洋書はひどくこの世界に合っていた。
男のお気に入りは深い青のカップだった。
上辺を金の模様が踊り、ソーサーにも花のように広がっている。
いつものようにそのカップを指差そうとおもったら棚の一番下の右下、そこのあるはずのカップがなかった。
今までにそんなことはなく店内を見回してみると、一番奥の席にひっそりと座っている少女の姿が目に入った。
フリルをふんだんにあしらった黒いドレスの少女は壁にかけられた絵のようにしっくりと馴染んでいた。
けれども知らぬ顔だ。その手元には青いカップがあった。
残念に思いながらも別のカップを指差した。
違うカップでいつものメニューを頼むのは何となく嫌で今までに飲んだことのないお茶を選んだ。
次の日店を訪れるとやはりあのカップはなかった。
奥の席にはあの少女がぽつりと座っている。
次の日も次の日も次の日も。
お気に入りのカップは自分の元へは返ってこない。
どんなに時間を変えてみたところであの少女はそこにいるのだ。
青いカップの代わりに白に緑の模様が映えたカップが定番になる頃に男はそっと禁忌に触れる。
「君の名前は？」

語り終えた紳士は女を奥に案内した。
絵を背にするように一人掛けのソファと机が置いてある。
目の前の壁には何もかかっておらず、白い壁紙が全体を覆っていた。

「まぁおかけください。お茶でもどうぞ」

いつのまにかティーカップが。
悪いと断ろうとしたのだが良い香りに誘われるままに腰を下ろした。
少し自分には柔らかいと思うソファはしっかりと全身を支えてくれた。

「すみれの香りでございます」

一口含めば鼻孔を芳醇な香りが満たし、ほうと息をつくころには心地よさが脳髄を満たす。
スプーンには小さな角砂糖が一つ。

「どうぞ砂糖を入れてみてください」

「ああ、私砂糖は入れないの」

これとて、そのほうがカッコイイと思い込んでいたからに過ぎないけれど

「特別に取り寄せたものなのですよ。ぜひ」

促されるままに砂糖を入れかき混ぜると瞬時に溶けてしまった。
もう一口含んで理解した。
これがこの紅茶にとっての適量なのだと。
入れないときよりもなお美味さが伝わってくる。
先ほどの2倍の心地よさが身体を弛緩させソファの硬さは調度良くなった。

「どうして、ここには絵を置かないの？」

空白の目の前を指していった。

「ここは余韻を楽しむための場所ですから」

「どうでした？あの作品は」

話を聞いて絵を見れば最初の印象とはガラリと変わった。
そういいたいのに何故か口を開くのが億劫で。
次第に瞼も下がってくる。

「すばらしいでしょう？たった数十年しか生きない種だというのに、人とはあれほどまでに強いものを残すものなんですよ。」

意識が緩やかに上昇と下降を繰り返す

「先ほどの絵はね、あるお方の生涯で一番印象に残っている場面な

のでございます」

「私は蒐集家でございますから」

「そのお方が亡くなるときに最も印象深かった場面を切り取ってもらうのでございます」

「アナタはどんな場面くれるのでしょうね」

「わ　た　し　死ぬの？」

やっと出たのはそんな言葉

「アナタは諦めてしまったのでしょう？」

そうだった
冷たい雨の中で
全てを放り出したのだ

「ここにたどり着けるのは死を目前にした方ばかりですから」

眩しいライト
けたたましいクラクション

「ごめんなさい。そんなに美しい場面をあげられないわ」

きっと今切り取れば怒った上司の顔が出てくるに違いない。
次に現れた人物にさんざんに叱られる場面を話されると思うと情けないばかりだ。
できるなら
もっと素敵な場面を残したいけれど

「それならばもう少し生きてみませんか？」

「・・・そんなこと可能かしら？」

「今ならば」

出来るのなら

「もう一口お飲みなさい」

言われたとおりに流し込むと意識が急速に落ちて行く
最後に聞いたのは

「特別サービスですよ
どうか私が感嘆するほど素敵な場面を作ってくださいね」

優しい声

次に意識がハッキリした時には
白い病室の中にいた

第5夜：椿姫

しんしんと。
音さえも吸収してしまう白い世界。
庭の椿の赤と葉の緑が美しく浮かび上がる。
髪に挿した椿の簪も同じように漆黒に浮かび上がった。

「もう姫様にはついていけません」

静寂を突き破ったのは、まだ幼さの残る声。
声の主をちらりと見たのは椿の簪を挿した美しい少女だ。
気だるげにけれども上品に着物をくつろげ、手には煌びやかな絵巻物。
対峙した少年は簡素な着物に真っ赤な顔をして眉を吊り上げていた。
少年の言葉に表情を変えずに少女は視線を巻物に落とす。
二人だけの生活で幾度と無く繰り返された言葉だった。

「ならば出ておいき」

違ったのは、続く少女の言葉だった。
いつもならば鼻で笑って新たな戯れを仕掛けるのに。
困惑が渦巻いて、けれども主の言葉に逆らう事はできず少年は踵を返した。
何度も何度も振り返り、白い世界に足跡をいくつもつけようとも優しい声はかからなかった。

ここは鬼の隠れ里。

少女は鬼の姫なのだ。
椿を愛する姫はいつしか椿姫と呼ばれるようになった。
鬼といっても人と全くの疎遠ではなく、たまに人々は薬を貰いにやってくる。
けれども畏怖の念は拭われず好んで近づくことなどありはしなかった。
あの少年以外は。

たった一人屋敷に残された椿姫はそっと微笑んだ。
これでいいのだと。
もうすぐ村の人間が押し寄せてくる。
自分たちがこんなにも不幸なのは鬼のせいだと。
飢饉も干ばつも流行り病もお前のせいだと。
なぜ息子を助けてはくれないのかと。
何十年も何百年も年を重ねてきたのだ。
人の厭わしい思考など、どの時代も似たり寄ったりなものだ。
嫌な事は他人のせい。
それが自分とは異なったものならなお良い。

椿姫は一番上等な着物に袖を通し、紅を引く。
見た目は少女なのに妖艶な笑みを浮かべて部屋の中央に座す。
心地よい沈黙はほんのひと時。
次第に怒号と金属の音が近づいてくる。

無様な姿は曝すまい。いつかあの子が椿姫に仕えていた事を誇りに思うように。

襖が開けられるのと同時に殺気がなだれ込んでくる。
ぎらりと狂気に光る双眸は鬼のものより、恐ろしい。

「すべてお前のせいだ。鬼なんかがいるから」

「覚悟は出来ているんだろうな」

椿姫は微笑んだ。
彼らを前にして何の覚悟が必要あるだろう
愛するあの子を手放す覚悟をした自分にあれより苦痛な決心などあるものか。

「お前たちも覚悟するが良い。このわらわに刃をむけることを」

一瞬の沈黙の後、人々はそれぞれ手にしたものを振り上げた。
喚き声に重なるのは優しく悲痛な叫び

「姫様―」

傷つくのも恐れずに走り寄る姿に目を細め
あの子の記憶に刻むように残酷に秘めていた想いを口にする

「わらわはそなたを愛しておった」

愛した子の見開いた瞳から零れ落ちる涙はひどく美しかった。

第6夜：陽と邂逅する者

「怖かった」

少年は震える声でそう呟いた。
泥と血で汚れた頬の上を幾筋もの涙が這っていく。
薄汚れたソレはぬかるんだ地面に吸い込まれ何の意味も持たなくなる。

「死んじゃうかと思った」

幼さの抜けない顔がぐしゃりと歪む。
恐怖のためなのか、それが去った安堵のためか頼りない華奢な体は小刻みに揺れ続けている。

「怖かった・・・」

無理もない。
青年はそう思った。
青年といっても見た目よりも十倍近く長く生きている月の血脈だ。
漆黒の衣服はじっとりと重くなり死臭を纏っているが本人には傷一つ無い。
対して少年は傷だらけだ
致命傷になるものはないものの、じわりと至る所から赤い液体が滲んでいる。
これほど多くの死を目の当たりにしたことなどないのだろう。
普通に暮らしているのならば、まずそんな機会はやってこない。
これほど身を危険に曝した事などないのだろう。
巻き込まれさえしなければ己と異質な者に会うことすらなかったの

だから。
青年は胸が痛むのを感じた。傷はどこにも無いというのに。
震える少年にかける言葉など見つからない。
汚れた頬を拭いてやるにしても手は赤かった。

「あんたが死んじゃうかと思った」

信じられない言葉に青年は瞠目した。
どうしたら軟弱な少年より先に死ぬ事などできようか。
ましてや自分は月の血脈。
例え首を切り落とされようとも陽の血脈に彼の命を奪う術などないのだ。

「私は闇の生き物だ。」

「それでもそう思ったんだ。あんたが死んだらどうしようって。怖くなった」

どくり

体が変な音を立てる。
さきほど受けた刃に何か仕掛けでもあったのだろうか。

「よかった」

どくり

「あんたが生きててよかった」

どくっ

息が苦しい。
何が鳴っているのか分からない。
けれども頭に響くほど大きなソレは・・・
陽の血脈に彼を傷つける事などできないはずなのに。

『なんて愚かしい』

昔の友人の声が思い出された。
友人は同族の刃の前に倒れたのだ。
身を投げ出した陽の血脈の子どもをかばって。
愚かしい。私こそがそう思った。
あと数日生きるかどうか怪しい子どもを助けるために凶刃の前に立ちはだかるなど。

『どうして！』

子どもは絶叫した。
私こそがその答えを知りたかった。
こんな見ず知らずの異種のために長年の友人を失うのだから。

『なんて愚かしい』

生を望みながら己からみれば異端な我らを助けようなんて。
そして

『それ以上になんて愛おしい』

友人は血があふれ出す唇で笑みの形をとった。
そんな気持ち分からない。
理解できない。
そんなもののために失うのか。
悲しみよりも憤りのほうが強かった。
そんなときでも聡い友人は

『お前にもいつか分かる』

そう言って瞳を閉じた。深く静かな泉のような青をたたえた瞳は二度と開かない。

「ありがとう」

少年は涙を拭ったが、頬は余計に汚れていた。

「・・・」

生きていて良かったなど言われた事などないだろう。
彼らの生きる夜の生はそんなものを麻痺させる。

「もう行け」

用事が済んだのなら関わるべきではないのだ。
世界が違うのだから。
たとえこの音の原因がちっぽけな少年のせいだとしても。

「うん」

落胆と決意とを滲ませた声。
少年は歩き始めた。振り返らずにもう一度だけ
「ありがとう」
青年の微かに浮ぶ笑みに照れたように月は姿を隠した

第7夜：夢に連なる者

「なんでも願いごとを叶えてくれるといわれたら貴方はどうします？」
飲み屋で偶々一緒になった男は私にそう聞いてきた。
そうとう酒が入っていたのだろう普段なら笑い飛ばすような話だが私は
「やっぱり金持ちになりたいと言うだろうさ」と酒を煽った。
机の上にはすでにいくつもの空いたグラスが乗っている。

「では酒の肴に話をしましょうか。」
「おお。そうか。」
「願い事を叶えてくれる魔物を呼び出した人の話を。」

不気味なほど大きな満月が中天に差し掛かる頃、青年は銀杯に水を満たし月の影をそれに映し、さらにそれを鏡にうつした。
いつか聞いた魔物を呼び出すための儀式だそうだ。
信じていたわけではないが、そんな不確かなものにすら縋りたい心境だったのだ。
１０分。
様子を見たが何も変化は起きない。
当たり前だ。
諦めて鏡に背を向ける。

コポッ

「！」

コポリ

背後で何かが形を成していく。
ぞわりと産毛が逆立ち、冷や汗が流れる。

ゴポッ

横目で後ろを窺うと銀杯の水面が沸き立っていた。
確かに何かがいる

「こんばんは」

ソレは声を上げた

暗く身の内に落ちてくる声だ

青年は後ろを振り向く

大きく開いた眼に映りこむのは・・・想像とは少し違った姿だった。
そこにいたのは全身に黒を纏った男だった。
それは帽子を胸に抱え、礼儀正しくお辞儀をした。
その面と少しばかり覗いた手だけが冴え冴えと光る月の光を反射して青白く見える。
ソレは面を上げ、ぬらりと光沢を持った深い闇の瞳で青年を見据えた。
魔物だと聞かされていた。
もっと恐ろしくグロテスクなものが飛び出すのかと・・・

「貴方が私を呼び出したのですね。」

机の上に並ぶ鏡や銀杯をソレは見回した。
ああ
やはり魔物なのだ
もう視線を逸らす事さえも叶わない

「さぁお聞きしましょう。」

魔物は妖艶に微笑む

「貴方の願いは何ですか？」

ああ、もう逃げることは叶わない

「ある人物の居場所を教えてほしい」

もう覚悟を決めた。
青年は魔物の目を見つめる。
魔物は口の端を少し上げ言葉を紡ぐ。

「それはどなたです？」

「師の仇だ。ルーサという男だ。」

「知ってどうするのです？」

次第に魔物は笑みを深めていく。
魂が恐怖するほど美しく。
アレは答えを知っている
私の咎を嘲笑うのだ

「殺すに決まっている」

「それほど憎いと？」

「当たり前だ」

青年の瞼の奥にある日の記憶が呼び覚まされる。
師の血が滴る剣を持ちこちらを見やった男の姿が。
青年は己の爪で傷が付くほどきつく拳を握りこんだ。

「ならば何故願わないのです？」

「何を・・・」

「願えは到底人間が与えられるはずなどない苦痛を私はその人物に与える事ができるのですよ？」

ぞわり

何かが背中を撫でる。
その可能性に気づかなかったわけではない。
けれど・・・

「そのためだけにこの十年生きてきた。自分で手を下さなければ意味が無い。」

先ほどよりも低い声で青年は答えた。

「そうですか」

笑うことを止めた魔物は月光の差し込む窓に手を翳した。
窓のフォルムが歪んでいく。
人一人が通れるほどの楕円状の形の歪みが生じた。

「ここを潜れば想い人のところまで行けますよ」

ゴクリと喉が鳴る。
腰に差した剣の重さが増していくような気がする。

足を踏み出してそこに近づくと耳の奥の重低音が大きくなっていく。
手を差し込めば、水の中に入るようにたいした抵抗も無く、腕まで沈んだ。

―全てを無にする覚悟があるのならどうぞ

どこかで聞こえた言葉に足を止めることはなかった。
全身を沈めると海底にいるような闇が向かえた。
冷水を浴びたように体が冷えた後、光りの世界に投げ飛ばされた。
青年はあまりの眩しさに目を閉じた。
それでも暗黒の世界を知った後では眼球を焼くような光りが襲った。
その光りが月の光と知ったのはしばらく経ってからだった。

かさり

枯葉を踏みしめる音がする
。恐る恐る瞼を上げるとそこには見知った顔があった。
月は青年の背後にあるのだろう。

向かい合った相手の顔は十年の月日が刻んだ皺の一本までも正確に表した。

「ルーサ」

怨嗟の言葉を吐きながら、青年は飛び起き剣に手をかけた。
対峙した相手は微動だにしない。

「よく来たね。カイ」

凪いだ湖面のような穏やかな声が振ってきた。
深い翠色の瞳も優しく細められる。
ひどく奇妙な再会だった。
あまりに強い月の光に闇のほうが慄くような。

「大きくなったね」

ルーサの言葉はまるで旧友にあったような嬉しさが含まれている。
それは青年の怒りを更に大きくさせた。

「黙れ！」

青年の剣はルーサの心臓を捉える。
それでもルーサの表情は変わらない。

「君は手に入れたかな？」

「煩い！」

カイは左手でルーサの胸倉を掴む。
その手を視界に納めてルーサは笑みを深めた。
「ああ、見つけたのだね」
切っ先が肌を傷つけて、血が衣服に滲んだ。
「何故お師匠を殺したんだ！」
「必要があったからだよ」
ルーサの顔は初めて苦痛に歪んだ。
それは決して体に走る痛みのせいではない
「何をっ！」
「ボクを殺しにきたんだね。」
「そうだ！」
「うん」
ルーサは両腕を広げた。
大きく、全てを受け入れるように。
「さぁどうぞ」

剣が揺れた。
その仕草は泣くのを我慢している時に兄弟子が良くやってくれたものだ。
「もう心残りは無いからね」
死を目前にしても穏やかな相手に腹が立った。
自分はこんなにも苦しいのに。
「ならば、お前の大事なものを奪ってやろうか！お前がオレにしたように」
「カイにはできないよ」
ルーサは哀しそうに笑う。
「できるさ！」

（自分の世界は死んでしまった師と目の前の青年だけだったのだから）

『ルーサ、私はもう長く生きれないでしょう』

『ルーサ！どうして！』

愛しき者の声が木霊する

「もう何も無いからね。十年前に無くしてしまったのだよ。」

「奪ったのはお前だろう！」

怒りに任せて突き出した剣先から厭な感触が全身に伝わる。
そこから溢れて溢れて己の身を濡らすのは・・・
それはどろどろとまとわり付いて

『ルーサ、私はもう長く生きれないでしょう』

声が聞こえる。
これは大好きだった師の声だ。

『そんな！』

これは優しかったはずの兄弟子の声だ。
これは何なのだろう。ぼやけた光りを辿っていくとその光景は鮮明さを増していく。
これは記憶か・・・
ルーサから流れ出すものが見せる十年前なのだろうか？

『大丈夫だよ。お師匠さま。サキは腕のいいお医者さんだもの』
『確かにサキはいいお医者様ですよ。だけど無理なのです』
『・・・』

『ルーサお願いがあるのです』
『・・・何ですか？』
『私が死んだら旅に出たとでも言って骸をどこか遠くに埋めてほしいのです』
『死んだ時の話など聞きたくありません』
『聞いて。ルーサ。カイはまだ受け入れることは出来ないでしょう』

それはきっと正しい。
自分でさえきっと取り乱して泣きじゃくって逝かないでと懇願するだろう。
己の死さえ願うだろう。
カイならばなお更。
一緒に逝ってしまうかもしれない

『こんなことを頼んですみません』

旅に出たといえばカイは帰ってくるまで待つ事だろう。
己から生を手放す事はしないはずだ。

『その間に生きる糧を手に入れてくれるといいのですが』

それから6日後。
死は大量の血を吐いて亡くなった。
けっしてカイに見せられる場面ではなかった。
約束どおり遠くへ運ぼうとして気づいてしまった。
カイはひたすら師の帰りを待つだろう。
二度と帰る事の無い人を何年も何十年も命尽きるまで、この何も無い森の中で。
外に出る事はないだろう。
ここがカイの世界なのだから。

生きる意味などソレしかない。
ただ待つ事。
他に生きるための糧などあろうはずが無い

『ダメです。お師匠様・・・これでは・・・カイは生きる骸です』

しばらく呆然としていると遠くでカイの声がする。
早くしなければ見つかってしまう。
それでは何もかも最悪の方向に進むだけだ。
視線を巡らすと剣が見えた。
ソレを手に取り、師の吐き出した血を塗る。
ソレを見れば自分が師を刺したように幼いカイには見えるだろう。

『お師匠～？』

元気な足音が聞こえる。扉まですぐそこだ

『お師匠』

扉が開く。
振り向いてカイを見る。
頬を上気させ大事そうに何かを腕に抱えていた。

『ルーサ。お師匠は・・・』

バラバラとひどく大きな音を立てドングリが床に落ちた。
カイの抱えていたものは森で拾った木の実だった。

『お師匠！』

カイがお師匠様に縋りつく。
ひどく冷たい事だろう。
もう動かない最愛の人は。

『どうして・・・』

剣から滴る血の音がやけに耳に響く。カイにも聞こえたのだろう。
涙でぐしゃぐしゃになった顔で私の握る剣を見つめた

『ルーサ・・・』

掠れた声が、耳に張り付く。もう二度とあの笑顔を見る事は無いのだろうと思いながら剣を床に放る。

ゴトリ

自分の身も地獄の深遠に落ちたようだった。

『ルーサ！なんで！』

カイが追いすがろうと手を伸ばす。
私は捕まらないように足早に部屋を出る。掴まってしまえば真実を話してしまう。
信じてくれるかは分からないけれど。

『ルーサ！』

きっとカイは私を追ってくる。私を追って外の世界に出てくるだろう。

私は逃げて逃げて逃げて・・・

あの子が糧を見つけれたら目の前に現れて終止符を打とう。

「嘘だ・・・」

こんなのはきっと嘘だ。このドロドロが見せる悪夢だ。

十年ぶりにあの子と出会った。大きくなった。

私の身長もこしてしまうほど。左手に光る指輪を見て思った。

ああ、この子は大丈夫だ。

糧を手に入れた。

ああ

お師匠様
もうそちらに逝ってもいいですか？

「そんな嘘だ」
十年も捜し求めた男は仇ではなかった。
それどころかその男は、青年のために自ら罪を被り、青年に殺されるためだけに十年生きてきたのだ。

―全てを無にする覚悟があるのならどうぞ

あの言葉の意味がやっと分かった。
青年は己の十年も相手の十年も無にしたのだ。
青年は事切れた、しかしまだ暖かい兄弟子を抱きしめて叫んだ

「お願いだ。魔物よ。どうかこの人を助けてくれ！どんな代償でも支払うから！」

どうか・・・どうか・・・奪ってしまわないで

あの深遠に落ちても構わないから

天空に鎮座する月が揺れた。水面に映るそれのように。

「おかえりなさい」

闇の声が青年を迎えた。
青年は自分の部屋にいた。ルーサも血も剣も無い

「・・・今のは」

「夢ですよ。あまりに強い光りを放つ月の夜は夢魔がやってくるかもしれません」

夢・・・あれが夢だというのだろうか？
あの感触も・・・
暖かさも

「現実と夢の狭間の世界を垣間見たのでしょう」

では、ルーサは生きているのか？

魔物が微笑む。
その優しい微笑みにルーサの無事を確信した。
それとあれは真実だと。
ルーサは師の仇ではない。

「まだ聞いていませんでしたね。貴方の願いは何でしょう？」

「え？」

「途中で夢魔に邪魔されましてね。あれは人の闇を好むのです。」

「・・・」

どこからが夢なのか・・・

「さぁ」

願い事は

「ある人物の居場所を教えてほしい」

「それはどなたです？」

「ルーサという男だ」

青年は肺の中の空気を搾り出し、新たは空気を吸い込む

「私の兄弟子だ。お礼が言いたい。」

それと自分はもう糧を得たのだと。
妻と二人の子供。
暖かい家庭。
それと優しい記憶

「いいでしょう。その願い叶えましょう」

どこから吹き込むのか魔物のマントを風が揺らす。
それは自らの意思で動くかのように広がって部屋全体を包み込む。
深海の闇が迫ってくる。
しかし、それは母胎の中のように暖かな闇だった。
一際大きな風が吹いて視界が開けた。そこには何も変わらない部屋があった。
魔物の姿はこつ然と消え、静寂があたりを支配する。今の魔物さえ夢魔が魅せたものなのか・・・
そんな思いでソレがいた場所を見つめた。
するとそこには一枚の紙切れが置いてあった。そこに書かれてあったのは、見知らぬ住所だった。

男の話はここで終わった。

「へぇーそれでそいつはルーサとかいう奴に会えたのかい？」

「会えたでしょうね。彼が魔物と呼んだやつは気まぐれですが嘘吐きではありませんから」

男の話の間にさらにグラスを三杯ほど空けた。
思考力は半分麻痺しており、男がまるで魔物と知り合いのように話している事にも疑問を持たなかった。

「それにしても魔物に夢魔ね～・・・」

「ええ。こんな夜は注意が必要ですよ」

満月が炯々と輝く。

ああ、今日は満月だったのか

何故か私には月の姿が理解できた。ここは室内で、窓がないにも関わらず。

「そんなにご利益があるなら試してみようかね」

冗談交じりに笑った私に男は告げた

「そうですね。必要なものは満月と銀杯に満たした水と鏡ですよ」

「ははははっありがとさん」

「では、私はこの辺で失礼しますね。もう大分長居をしてしまいました。」

「ああ。そうかい。帰るのか。」

男は音も無く席を立つ。

振り向いて行ってしまうところで私は男に声をかけた。

「なぁ話のカイってのはあんたの事か？」

「いいえ。違いますよ」

男は此方を見ずに告げた。

「そうかい」

男はそのまま行ってしまった。
私は手元にある酒を飲み干した。

・・・味が無い

それほどまでに飲んだのだろうか

パチリ

夢の覚める音がした
私は家に帰る列車の中で目を覚ましたのだ。

―カイはね。私の夢に掴まった人の名ですよ

「君は余計な事ばかりしますね」

「フフッ人間は面白いからね。暇つぶしにはもってこいだよ。」

夜の中で黒と赤が対峙した。

「あのカイってやつもボクのおかげだよ？ボクがああしなきゃ、あいつはルーサを殺しちゃっただろうよ。君は後味の悪い思いをしなくてすんだのだから、感謝ぐらいしてもらいたいよ。」

赤い髪を持つそれは空中でひらりと舞う。

闇に溶ける黒い者とは反対にそれはくっきりと浮かび上がる。

「君が勝手にやったことでしょう」

「まぁそうだけどね」

「よほど夢魔は暇なのですね」

「ボクタチは好き勝手にやるのが性に合ってるのだよ。契約に縛られるなんて真っ平だ」

後半の言葉を吐き捨てる。

「それにね。限りない欲望を持つ人間の願いを叶えるほど酔狂ではないのだよ。」

そう言ってそれは消えた。

「バイバイ。ジン。魔物の名を持つ哀れな咎物よ。」

残ったのは静けさだけ。
やがて影も夜の中から消えうせた。
月だけが何も無かったかのように夜道を照らす。
夢と現と魔の道を

エピローグ

お疲れ様でございます
陽の血脈の方
どうだったでしょう
お気に召した一夜はありましたでしょうか
お楽しみいただけたのならば光栄でございます

他にも月の血脈はたくさんいるのですがね
その話は次回にして
今回はこの辺でお開きにいたしましょう
あなた方も
随分と月の光を浴びてしまいましたから

一つだけ良い事を教えましょう

気の遠くなるほど長い時間
月の光を浴び続けると月の血脈になってしまうのだそうですよ

けれど
好奇心でお試しになるのはお勧めできません
たとえ
気の遠くなるほど長い時間
太陽に身を焦がされたとしても陽の血脈には戻れませんからね
陽の世界に飽きて
月の血脈になるのもお勧めできません
そちらの世界の時間を持て余すなら
此方の世界など苦痛でしかないのだから
それでも
己に流れる血を疎んだならば
満月の下
夜の帳に身を投じてごらんなさい
誰かが戯れに
寝物語をしてくれるかもしれません
子守唄を歌ってくれるかもしれません
その中で
月の光の美しさに気づいたならば
陽の光りを恋しいと思えたならば

あなたほど
幸せな方はいないでしょう

ああ

もうこんな時間でございますね
おしゃべりが過ぎました
もうすぐ日が昇ってしまう

では
いつの日にか
再びお目にかかれることを願いましょう

それでは

良い一日を

エピローグ（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8340c/

月の箱庭

2010年10月11日17時46分発行